

—Photogravure—

## 火葬骨の鑑定例

大野 曜吉<sup>1</sup>・山本伊佐夫<sup>2</sup><sup>1</sup>日本医科大学法医学教室 <sup>2</sup>神奈川歯科大学法医歯科学教室

## A Case of Identification of Cremated Bones

Youkichi Ohno<sup>1</sup>, Isao Yamamoto<sup>2</sup><sup>1</sup>Department of Legal Medicine, Nippon Medical School<sup>2</sup>Department of Forensic Dental Medicine, Kanagawa Dental College

図 1



図 3



図 4



図 2



図 5

E-mail: ohno@nms.ac.jp

Journal Website ( <http://www.nms.ac.jp/jnms/> )



図 6

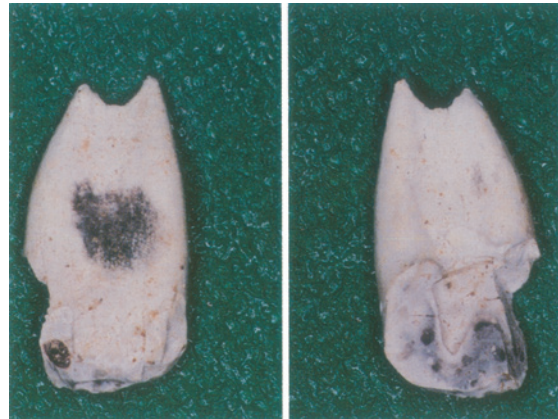


図 8



図 7



図 9

図 1 父親が息子（享年 11 歳）の遺骨を 35 年間寺に預けていたが、墓所に埋葬すべくひきとったところ、骨壺が当時のものと異なっていたという。不審を抱いた父親が弁護士とともに遺骨を当教室に持参したので、検査を行った。

図 2 火葬骨は数百の灰白色に強く焼損した骨片となっている。従って、血液型や DNA などの生化学的検査は不可能である。また、長幹骨は断片化し、再構築して長さを測定して身長を推定するのは極めて困難と思われた。そこで、年齢推定可能な特徴を有する骨片を検索したところ、以下のものが発見された。

図 3 右大腿骨上部では、骨頭部が欠落し、頸部の骨頭部付着面は波状を呈する軟骨付着面が残存している。

図 4 腸骨翼の一部の骨片が 2 つある。腸骨稜上縁部に波状の構造が残り、軟骨が付着していたと考えられる。

図 5 左恥骨結合部があり、結合面に波状構造や小結節がみられ、若年者の恥骨結合の特徴を有している。

図 6・7 左右大腿骨および脛骨の膝関節部を形成する骨片があり、それぞれの骨端部を発見することができた。それぞれ大腿骨および脛骨の骨幹部と結合面の形態が一致した。すなわち、膝関節部では骨幹部と骨端部とが未だ骨性に結合しておらず、軟骨を介して結合していたものと考えられた。

図 8 さらに詳細に骨片を検査したところ、2 本の歯牙が発見された。

1 本は上顎左右不明の小白歯の歯冠の一部と歯根であり、歯根は未完成で、2/3 程度完成している。従って、法医学科学的に 12～13 歳以下と推定される。

図 9 もう 1 本は下顎左側の大白歯の歯冠の一部と近心根であり、近心根は単根で完成している。第 1 大白歯の歯根の完成は 9～10 歳、第 2 大白歯は 14～16 歳、第 3 大白歯は 18～25 歳とされている。従って、上記小白歯の所見と併せ考えると第 1 大白歯ということとなり、9～10 歳以上、12～13 歳以下、つまり、息子の死亡時の年齢と一致することとなり、その他の骨所見も若年者の骨の特徴を有していることから、本火葬骨は父親の息子の骨として矛盾しないとの結論に達した。

以上の結果を検査に立ち会った父親に説明したところ、十分に納得され、遺骨を引き取っていかれた。形態学的検討しか残されていないこのような事例では、法医学・法医学科学的の共同の検討が重要である。

#### 文 献

丸田哲生，他：火葬骨鑑定の 1 例：法医学の実際と研究 1996; 39: 67-70.